

研究成果報告書をまとめるにあたって

パナソニック教育財団の実践研究助成を受けると、その過程や成果を研究成果報告書（以下、報告書）にまとめることとなります。これらの報告書はウェブで公開され、助成校の実践は他の学校の教師たちと共有されることとなります。

報告書は、指定されたテンプレートに即して、6枚の分量でまとめることとなります。その作成は、教師にとって、自らの実践を振り返るうえでとても重要な過程です。実践をやりっぱなしにするのではなく、その成果や課題を記録し、それを整理し、共有することで、学校における教師たちの学び合いが進展するでしょう（「学びの共同体」が発達していくでしょう）。仲間と協働して課題解決や新しい挑戦に取り組み、記録に基づいて実践を評価する過程、その成果と課題を文章にまとめることで、助成期間が終了しても、学校が実践研究を継続・発展させる可能性が高まります。報告書の作成は安易なことではありませんが、それを経て、実践者は、研究の楽しさや面白さを再度味わい、次なる可能性を見つけることもできます。

1) 報告書の作成を始めるにあたって

「さあ、実践を報告書にまとめよう」と思っても、いきなり文章を書き始めることはできません。その前に、やっておくべきことが2つあります。

まず、目的の再確認です。申請書を読み直し、申請した研究の目的が何だったのかを確認しましょう。実際に実践をはじめると「これもできた」「あれもわかった」「これがおもしろい」と多くの発見や知見を得られると思いますが、報告書にそれを雑多に書いてしまえば、読み手が混乱してしまいます。そのため、まず、研究の目的が何かを再確認し、その目的が達成されたかどうか（達成されなければ何が原因だったのか、どのような課題が残されたか）を報告書に記すよう、留意しましょう。報告書では、それを説明するために、どのような実践に着手したのか、その成果と課題をいかなるデータを集めて確認したかを綴ることになります。換言すれば、報告書では、研究の「背景」-「目的」-「方法」-「成果」がつながっていることが重要です。

もう1つは、データの整理です。実は、申請が採択された時点で、報告書の作成は始まっていると言えます。なぜなら、採択時から報告書作成にむけたデータ収集がスタートするからです。写真や動画、アンケート調査、観察記録、ワークシートや作品など児童・生徒の成果品を収集し、整理しておきましょう。報告書はデジタルデータとなりますので、データは、できるだけデジタル化しておくとい良いでしょう。

2) 報告書作成の留意点

それでは、報告書の項目に即して、記入上の留意点を解説しておきましょう。すぐれた報告書は、以下の要件を満たしています。

<タイトル部分>

(1) 研究課題

研究課題は、原則として申請時と同じ題目としてください。実践を進めるうちに、研究の目的が変わってしまうこともあります。基本的には申請した研究課題に即して実践は展開されるはずですが、ただし、研究を進めるうちに、研究の視点が具体的に変わった場合、研究課題に「副題」をつけても構いません。たとえば、「特別支援学校におけるロボット活用によるコミュニケーション力の向上」について研究するとしましょう。実践を通して、児童の発話に大きな変化があった場合、副題に「児童の発話の質的变化に着目して」といった副題をつけることで、報告書の記載内容の特徴を強調できます。ただし、こうした場合は、事務局に相談してください。

(2) 研究内容のキーワード

研究内容に関するキーワードを2-5つあげてください。キーワードは、読み手が興味のある実践研究を検索するための手がかりですから、極めて重要です。当該研究がどのような分野や領域に属するものなのか、その特徴はなにかをよく考えて、キーワードを設定してください。今日、例えば、ユニバーサルデザイン、思考力・判断力・表現力、ICT活用、メディア・リテラシー、情報活用能力、アクティブ・ラーニングといったものが、よく用いられています。

(3) 学校名、所在地、ホームページのURL

学校名と所在地を正しく表記してください。ホームページのURLにつきましては、学校のホームページがあれば記載してください。また、実践について報告書には書けなかった詳細な情報をウェブで公開している場合、そのURLも示してください。

<本文>

報告書には、次の6つの項目と参考文献を記します。報告書のメインは、当該研究で何をしたのか（「3. 研究の経過」と「4. 代表的な実践」）、どのような成果があったのか（「5. 研究の成果」）です。それらを、実践の様子の写真、モデル図、分析結果の図表などを示しながら、読者にわかりやすく伝えましょう。

1. 研究の背景
2. 研究の目的
3. 研究の経過
4. 代表的な実践
5. 研究の成果

6. 今後の課題・展望
7. おわりに
8. 参考文献

(1) 研究の背景

ここでは、なぜ、この研究課題に関心を持ったのか、取り組む必要があったのかを、児童・生徒の実態、学校の実践研究の歴史などを参照しながらできるだけ具体的に記入してください。

すでに申請書を書く際に研究の背景を記載していると思いますので、それを加筆・修正するとよいでしょう。研究をはじめると参照した先行事例や文献が増えますので、それらを加えながら、研究の背景をまとめましょう。なお、参考にした先行事例や文献は報告書の読み手がそれに接近できるように、必ず最後の「参考文献」に記載してください。

(2) 研究の目的

当該研究において何を明らかにしようとしているのか（この研究を通じて何を明らかにできるのか）について書いてください。注意すべき点は、研究の背景と目的の一貫性です。研究の背景に関する叙述に続けて、「以上のことから、本研究では、・・を明らかにする」という文章を盛り込むとよいでしょう。

また、その研究の目的（それを明らかにすることが）、学校教育全体においてどのような意義があるのか（どのような意味で社会的要請の応えるものであるのか）、他の研究と比べてどのようなユニークさがあるのか、どのような点が他校のモデルとなりうるのかについても言及されていれば、読み手は、自身の実践と関連づけながら、報告書を読むことができます。

なお、読み手に研究の特徴が伝わるよう、主張点を太字にするなどの工夫にも取り組んでもらいたいと思います。

(3) 研究の経過

当該研究における、実践の過程、それを評価するための記録の収集と整理等について記述してください。そのポイントは、①時期、②取り組み内容、③評価のための記録を明記することです。たとえば、そうした取り組みを表などでまとめるとわかりやすいでしょう（表1）。

表1：研究の経過（例）

①時期	②取り組み内容	③評価のための記録
5月1日	児童の実態把握	アンケート調査（児童）
6月2日	ロボットを活用した学校間交流の実践	観察記録・写真（児童） インタビュー調査（実践者）

7月3日	授業研究会	教師の所感（ポストイット） 参加者からのコメント（保護者）
------	-------	----------------------------------

なお、報告書の作成までに、②取り組み内容と③評価のための記録の整合性について確認してください。そして、当該の取り組みを説明する記録が不足していると思われる場合には、可能であれば、追加データを収集してください。その際に、研究計画策定時に検討した、以下のような点に留意してください。

- ・ 成果を捉えるためには、実践の事前と事後の記録が有用なので、データを定期的に収集すればより詳細にその変化を捉えることができる。
- ・ 児童・生徒の変容データだけでなく、実践をした教師、実践を観察した同僚、保護者等にも実践を評価してもらおうとよい。
- ・ 記録するものには、量的なもの（数値として把握できる情報）と質的なもの（自由記述や児童の作品、観察記録など数値に表せない質的な情報）がある。研究目的に合わせて、アンケート調査、インタビュー調査、発話記録、観察記録などの手法を選択するとよい。

（４）代表的な実践

ここには、実際に本研究で取り組んだ具体的な実践事例を書いてください。報告書のメインの部分になります。単に何をしたかをリストアップするのではなく、前述した「取り組み内容」から代表的なものをいくつか選択し、その詳細を説明してください。

なお、代表的な実践の示し方は、パナソニック教育財団のホームページの「平成 27 年度（第 41 回）実践研究助成 一般助成 優秀 研究成果報告書」を参考にしてください。

http://www.pef.or.jp/01_jissen/06_seika/h28_seika_report_02_sub.html

（５）研究の成果

研究の成果を論理的に示すよう、留意してください。先述したように、その成果は、研究の目的に即して示されるべきです。たとえば、「児童の英語によるコミュニケーションへの関心を高める」ことが研究の目的であれば、そうしたことに対するアンケートの結果を図で示したり（量的データ）、彼らの振り返りや発言（質的データ）を引用したりして、当該実践の成果をアピールしてください。

研究の成果を主張する際に重要なことは、できるだけ客観的な記述に務めることと、実際の様子ができるように具体的に記述することです。そのためには、このパートの構成が以下のピラミッド図のようになるよう、工夫してください。

<成果の論理的な示し方>

成果を論理的に示すためのピラミッド図を紹介したいと思います。一番上には、主張したい「成果」を書きます。次いで、その成果があると判断できる理由を複数書きます。さらに、その理由の根拠を書きます。根拠は、児童・生徒の実態、学校などの実践研究の歴史などが該当します。

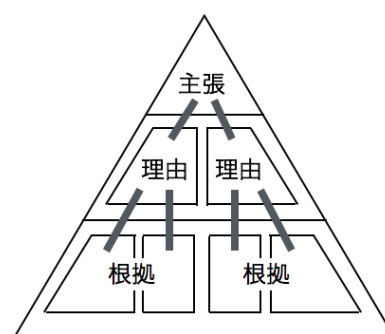


図1 ピラミッド図

なお、写真や児童の発言（インタビューや発話記録）を記載する場合は、児童が特定されないように配慮することも必要です。

また、紙幅に余裕があれば、本実践でみられた成果を幅広く論じてください。例えば、子どもの学力や教師の指導力の充実に加えて、学校の組織力（異校種や地域との連携など）の拡充、他校園への発信（研究発表会の開催、ホームページによる発信、研究紀要や実践記録集の刊行など）などの側面から、研究の成果を述べるとよいでしょう。

図表を挿入する際には、参照しやすいように図表番号をつけましょう。

図の場合は図の下に、表の場合は表の上に記載しましょう。

(6) 今後の課題と展望

ここでは、研究の遂行を通して明らかになった問題等を示してください。問題等が残ることは悪いことではありません。それらは、むしろ、同じような研究に着手する人が注意すべき点であり、挑戦すべき課題として参考にできる点です。そのため、問題等を把握した場合、なぜその問題が起こったのかについてしっかり考察してください。これが十分にできていれば、次なる研究に対する重要な示唆となります。

また、本研究の成果を土台として展開する研究の計画や、研究成果を普及させるための活動計画も可能であれば記載しましょう。それらによって、研究の継続・発展を意識できるからです。

(7) おわりに

最後には、報告書の項目に即した叙述には盛り込めなかった内容、実践者の考えたことや感じたことなど、当該研究を通しての所感を述べてください。たとえば、研究を円滑に進めるための細やかな配慮や気配り、組織的に取り組んでいくためのコツなども是非表現してください。また、研究に協力してくれた方々への謝辞などがあればここで述べてください。

(8) 参考文献

最後に参考にした他校の実践や教育理論などを記載してください。

文献の記載の仕方は次のとおりです。

<著書の場合> 著者名、出版年、題目、出版社

例) 野中陽一 (2010)『教育の情報化と著作権教育』三省堂

<論文・紀要の場合> 著者名、出版年、題目、論文誌名、出版号、ページ数

例) 木原俊行, 島田希, 寺嶋浩介 (2015)「学校における実践研究の発展要因の構造に関するモデルの開発: - 「専門的な学習共同体」の発展に関する知見を参照して-」『日本教育工学会論文誌』39(3), 167-179

<ウェブの場合> 作成者 (わかれば)、ウェブページのタイトル、URL、参照日

例) パナソニック教育財団『平成 27 年成果報告書』

http://www.pef.or.jp/01_jissen/03_list_h27.html (2016 年 8 月 2 日参照)

3) 報告書を書き終わったら

報告書を書き終わったら、チェックリストで記載にもれがないかを確認してください。

また、報告書の内容や表現について、何度も見直しをしてください。研究に初めて接する他校の教師が読むと、その内容がわかりにくいことがあります。自分では「背景」-「目的」-「方法」-「成果」がつながっているように思えても、他の人からすれば齟齬があるかもしれません。それゆえ、報告書の点検は複眼的に営まれるべきです。必ず提出の前に研究推進組織のメンバーで報告書の内容や表現を確認してください。さらに、管理職に点検・評価してもらってください。報告書の作成に多くの人に関わることは、研究知見を学校全体で共有することを促します。実はそうした副次効果も、報告書の作成という活動は有しています。

また、他校などの教師や教育委員会のスタッフ、さらには大学研究者などにも、報告書の内容や表現を点検してもらえるとその内容がぐっと充実します。

実践研究助成 (一般)「研究成果報告書」提出時のチェックリスト

「研究成果報告書」作成・提出時のチェック項目	<input checked="" type="checkbox"/>
【内容】	
1. 研究の背景 (着想に至るまでの問題意識等) を具体的に記述していますか。	
2. 研究の社会的意義について記述していますか。	

3. 研究の背景をふまえた上で、研究目的を記述していますか。	
4. 研究の経過について、時期、取り組み内容、評価のための記録を記述していますか。	
5. 代表的な実践について、取り組み内容から抽出し、それを具体的に記述していますか。	
6. 研究の目的をふまえて、その成果を記述していますか。	
7. 研究の成果を多面的に捉え、記述していますか。	
8. 研究の成果を量的・質的なデータを示しながら具体的に記述していますか。	
9. 今後の研究にむけた課題について、記述していますか。	
10. 今後の研究の展望やその計画・内容について記述していますか。	
【形式】	
11. パナソニック教育財団が指定した書式となっていますか。	
12. 原稿の推敲を行い、誤字脱字、文字化けがないことを確認しましたか。	
13. 図表や写真を用いるなど、ビジュアル面で工夫していますか。	
14. 参考文献がある場合には、その一覧を巻末に掲載していますか。	
15. データ容量は2MB以下におさまっていますか。	
【手続き】	
16. 管理職等に、研究成果報告書の内容を確認してもらいましたか。	
17. 研究組織のメンバーによる相互評価を行い、推敲につとめましたか。	
18. 教育委員会スタッフや大学研究者などに、研究成果報告書の内容・表現についてアドバイスをもらいましたか。	

4) おわりに

実践研究助成の専門委員が毎年研究成果報告書を読みますが、現場の関心、問題意識がわかり、またそれらに対する様々な創意工夫がみられ大変参考になります。たとえば、実践を行うためには、個々の教師の努力だけではなく組織的な取り組みが行われ、地域（学校外の機関、保護者や大学など）と連携なども行われていることがわかります。また、素晴らしい実践にも、その過程において、様々な問題や悩みを抱えながら、トライアンドエラーを繰り返しながら協働的に、創意工夫をしながら取り組まれていることもわかります。

本報告書では、結果としての成果だけではなく、ほかの人が参考にしていけるような過程

や方法も示されており、今後、同様の実践を試みる先生方や学校に大変参考になることでしよう。みなさんの研究成果報告書を毎年とても楽しみにしてお待ちしております。

＜コラム：実践研究助成 研究成果報告書の評価基準＞

一般助成校の報告書には従来から優れたものが数多くありましたが、特に優秀なものを、最優秀賞、優秀賞、佳作として選出し、表彰するという取り組みが平成27年度から始まりました。平成28年度の報告書については、最優秀賞1件、優秀賞3件、佳作10件が表彰されることとなりました。

実践研究助成の一般校研究成果報告書の表彰は、多様な専門性を有する大学研究者たちが、次のような観点に基づいて、その内容や表現を評価していきます。

内容面1：研究内容・活動の創意工夫

取り組みにその学校ならではの工夫を確認できる。

内容面2：研究成果の説得性

取り組みの成果を量的・質的データで説明している。

内容面3：研究内容の適用可能性

実践推進上の問題解決の過程を示しており、取り組みを他の学校が参照しやすい（実践推進上のつまずきや悩みにも言及している）。

内容面4：実践の批判的検討

取り組みを自己点検して、改善のポイントやその具体化を構想している。

形式面：表現の工夫

分かりやすい文章で記されており、図表や写真が適切に用いられている。

内容面3や内容面4の観点が定められていることに注意してください。研究である以上、期待した成果が得にくいこともあるでしょう。実践研究の場合は、要因が複雑ですから、そうなることもしばしばあるでしょう。しかし、失敗から次なる実践者が学ぶものは少なくありません。ですから、それらもきちんと、ていねいに、記しているものが表彰の対象になりやすいと言えます。